

「洞爺丸はなぜ沈んだか」 上前 淳一郎 著 文春文庫 1980年11月発行

「タイタニック号に次ぐ世界第二の海難事故」とも言われる（事実は異なるが）、日本海難史上最大の惨事が、かつてこの北海道で起きたことを皆さんは知っていますか？1954年9月26日、当時最新鋭の設備を備えた日本国有鉄道の青函連絡船「洞爺丸」が、台風15号によって函館湾内七重浜に座礁、転覆し、乗員乗客合わせ1,155名の尊い命が失われ、あるいは行方不明となりました。

私には、今もその七重浜（現北斗市七重浜）で寺を営む親戚がおり、函館市に住んでいた幼少の頃、よくその地に足を運んでいました。その度に、「次から次に打ち上げられてくる遺体を浜で茶毘に付し、夜を徹して供養したものだ…。それはそれは地獄のようだった…。」と聞かされました。また、私事ですが、当時国鉄青函局に勤務していた亡父は、23歳で遭遇したこの重大事故の体験から、国鉄退職後に僧侶になることを決意したそうです。

- ・ 「天気図」とのあだ名がつくほど気象に詳しい慎重派の船長が、なぜ出港の判断を下したのか？
- ・ 運命の悪戯とも言える「2分間の停電」や「台風の目のような晴れ間」に、どう翻弄されて行ったのか？
- ・ 湾内で投錨、仮泊する緊急対応策を取ったにも関わらず、なぜ転覆に至ってしまったのか？

詳細な聞き取りと緻密な検証に裏付けされた贅肉のない文章は怖いほど臨場感に溢れ、刻々と忍び寄るその瞬間に向けて何が起きていたかを克明に描いています。秋冬の夜長、読者に「背中がサワサワと寒くなる」と言わしめた珠玉のノンフィクションに、是非向き合ってみてください。